進捗報告 GATE Simulation

2014 / 5 / 30 濱西 亮











Position Reconstruction

(光子の検出分布から相互作用(LXe,γ)の位置の構成、 エネルギー損失量から線源の位置を構成)

- 錦戸文彦さんJJAP論文

-MEG 西村康弘さん博士論文

Position Reconstruction

導入



E2, X2, Y2, Z

(LOR

・光子の検出量・検出位置から、γとLXeの相互 作用の位置の再構成・エネルギー損失

 Compton coneの重ね合わせによる 放射線源の位置特定





- "Performance of Prototype Liquid Xenon Scintillation Detector System for Time-of-Flight Type Positron Emission Tomography with Improved Photomultiplier" 放射線医学総合研究所 錦戸文彦さん JJAP投稿論文
- MEG実験

東京大学 西村康弘さん 博士論文



- TOF (Time-of-Flight)型PET
 - γ線検出の時間情報を放射線源の位置 構成に利用
 - 5 mm の空間分解能を 得るために100 ps の

Timing Resolutionが必要

(TOF情報のみで)

- 応答速度の速いLXeを使用







- 新規のR5900(ゲイン・量子効率が改善)を用いての試験



- LXe chamber / 純化システム
 - Ba-Ti ゲッターで Xenonを純化 (実験前)
 - 80 150 ℃でベーキング
 - 10⁻⁶ Torr (@室温)
 - SAESゲッターでXenonを純化 (実験中)
 - -103 ~ -93 ℃を維持 (実験中)
- PMT
 - R5900-06MOD (Q.E. : 5 %, GAIN : 10⁵)
 - − → R5900-06AL12S-ASSY (Q.E. : 25 %, GAIN : 10⁶)
 - (光電面の材質・ダイオードの数が異なる)
 - (Rb-Cs-Sb → K-Cs-Sb, 10 → 12)



セットアップ

 ポジトロンソース
 ²²Na(511, 1274 keV)
 2検出器間の距離
 (511 keVを検出するため)
 70 cm

- PMT数
 - •32個
- レコーダーとして
 - TDC (t 分解能)
 - QADC (E 分解能)





- 結果
- 解析手法
 - モンテカルロシミュレーションで Xenonのシンチレーション光が どれ程光電子になるのか計算 (GAIN•Q.E.は実験結果を利用)
 - 光電面に到達する光子数は Geant4でシミュレート (屈折率 Xenon:1.62 Quartz: 1.48)
 - PMTからの信号の出力分布の 重心から線源位置の計算

$$N = \sum_{j=1}^{32} N_j$$

$$X = \frac{1}{N} \sum_{j=1}^{32} X_j \bullet N_j$$

$$Y = \frac{1}{N} \sum_{j=1}^{32} Y_j \bullet N_j$$

$$Z = \frac{1}{N} \sum_{j=1}^{32} Z_j \bullet N_j$$



・シミュレーション結果 - 3つの平面に分けて結果を表示





- エネルギー分解能

 32個のPMTの全てのシグナ ルから決定
 - •エネルギー分解能:35.5%
 - -2.5 < X (Y, Z) < 2.5の範囲内
 (Central volume) のPMTのシ
 グナルだけを使用した場合
 (有効面積は全体の20.5 %)
 - エネルギー分解能:15.9%





KOHA

YNU



- 実験値 ?
 - 位置分解能: 3.3 mm. 3.5 mm (FWHM)

• 時間分解能





TDC (ch)

YNU

- ・線源の位置の特定
 - 2つの検出器のペアを20°ずつ (9 angles) 回転させ描写を重ねた
 - ML-EM (Maximum likelihood exception maximization) アルゴリズムを用いて視 野領域 (FOV) の中心のみ再構成

- 空間分解能: 3.3 mm







• 最尤推定-期待值最大化(ML-EM)法

- (1) ある画素jから放出されたガンマ線が検出器iで検出される確率Cijを求める。
- (2) 初期画像となる λ_0 を仮定する。普通は一様分布を仮定する。
- (3) 以下の式を用いて推定画像を更新する。

$$\lambda_j^{k+1} = \frac{\lambda_j^k}{\sum\limits_{i=1}^n C_{ij}} \sum\limits_{i=1}^n \frac{y_i C_{ij}}{\sum\limits_{j'=1}^m C_{ij} \lambda_j'^k}$$

ここで λ_j は推定される画素jにおける放射線濃度、 y_i は検出器iで検出されたイベントの数、 C_{ij} はある画素jから放出されたガンマ線が検出器iで検出される確率を表す。

(4) (3)の計算を全ての画素に対して反復して行うことにより、推定画像 λ_j は真の 放射線濃度分布の画像に近づいていく。



- まとめ
 - ²²Naで新しい検出システムをテスト
 - エネルギー分解能: 15.9%
 - 位置分解能: 2.1-3.5 mm
 - タイミング分解能: 260 ps
 - Reconstruction imageの分解能: 3.3 mm
 - → 実際のTOF-PETに充分な値 ?



A Search for the Decay μ^+ ->e⁺ γ Using a High-Resolution Liquid Xenon Gamma-Ray Detector

・シンチレーション光

- 光電子数の再構成

$$N_{pe,i} = C \times \frac{Q_i}{(G_i \times CE_i \times e)}$$

- 光子数の再構成

$$N_{pho,i} = N_{pe,i} / (QE_i)$$

i: PMT、G_i: ゲイン、e: 電荷素量、C: 回路による減少量(定数) CE_i: 集光効率(PMT)、QE_i: 量子効率



A Search for the Decay μ^+ ->e⁺ γ Using

a High-Resolution Liquid Xenon Gamma-Ray Detector

- 位置の再構成
 - 1. Weighted mean of PMT's position
 - 早い段階での試験・校正向け

- 偏りが出てしまう

- 2. Linear fit with Monte Carlo simulation
 - 正確な光子の伝播がシミュレートできない
- 3. Fit with light distribution on a face
 - 光子の分布に対してフィッティングすることで2次元ピークを 算出、フィッティングの分散に応じて3次元目の位置の特定
- 4. Least squares method (最小二乗法)
 - 一番最適だとされている(2008, 2009のMEG実験で使用)
 - 入射位置の近くの一部のPMTのみを使用



- Least squares method (最小二乗法)
 - $\chi^2_{position}$ の最小化によって位置 (u, v, w)の再構成

$$\chi^{2}_{position} = \sum_{i}^{PMT} \frac{N_{pho,i} - c \times \Omega_{i}(u, v, w)}{\sigma_{pho,i}(N_{pho,i})} \qquad ? \qquad u = \zeta$$

$$v = R_{inner} \times \arctan(\frac{v}{\chi})$$

$$w = \sqrt{\chi^{2} + y^{2}} - R_{inner}$$

c : free parameter for fitting ?

 Ω_i : solid angle subtended by photo-cathods 立体角 (数値計算) ? $\sigma_{pho,i}$: 光子数の統計誤差

$$\sigma_{pho,i}(N_{pho,i}) = \sigma(\frac{N_{pe,i}}{QE_i}) = \sqrt{\frac{N_{pe,i}^2}{QE_i^4}}(\sigma(QE_i))^2 + \frac{1}{QE_i^2}(\sigma_{pe,i}(N_{pe,i}))^2$$

σ(QE_i)=0 ==> 第二項のみを考慮

A Search for the Decay μ^+ ->e⁺ γ Using a High-Resolution Liquid Xenon Gamma-Ray Detector



- To avoid pile-up and shower fluctuation (解析に使用するPMTの数を制限)
 - First fitting
 - 検出光子数が最大のPMTまわり45個のPMTを使用
 - Second fitting
 - 更に15個のPMTに限定
 - MCで得られたu w平面の偏りをMCシミュレーションから 計算される相関から補正 (内面でのγの偏りのある作用により発生、v方向には発生しない)





タイミングの再構成 – 各PMTへの光子の到達時間から計算

$$t_{hit,i} = t_{pmt,i} - t_{delay,i} - t_{offset,i}$$

 $t_{hit,i}: 相互作用が起こった時間$ $<math>t_{pmt,i}: 波形解析で得られるタイミング (ピークから30%の強度の時間)$ $<math>t_{offset,i}: 各チャンネルのオフセット$



- $t_{delay,i}$: 相互作用からPMTに到達するまでの伝播時間 (t_{prop})によって生じる遅延 $t_{delay} = t_{prop}(d, v_{eff}) - t_{indir}(\eta) - t_{walk}(N_{pe})$

 $t_{indir}(\eta)$: vertex positionとvertex axis of PMTの角度の違いから反射や散 乱で生じる時間 $t_{walk}(N_{pe})$: time-walk補正 ?

ー最小二乗法
$$\chi^2_{time} = \sum_{i} \frac{(t_{hit,i} - t_{LXe})^2}{(\sigma_{t,i}(N_{pe}))^2}$$
 $\sigma_{t,i}(N_{pe})$: PMTの時間分解能



a High-Resolution Liquid Xenon Gamma-Ray Detector



・エネルギーの再構成

- 補正した重みを持つ光子の総数で推定

- 重みはPMTの光電面のカバー領域の相反性で決まる
 電荷量、再構成位置に依存せず一定 ?
- エネルギーは立体角・再構成した位置・light yield の補 正をした光子の総数で決定

 $Energy = F(u, v, w) \times S(u, v, w) \times T(t) \times C \times \sum_{pho,i}^{846} (N_{pho,i} \times W_i)$

- F: 位置の再構成で生じる補正の要素 ?
- S: 立体角に関する補正 ?
- T: light yieldに関する補正 ?
- C: 光子 → エネルギー変換の係数 ?

W_i:重み定数 ?





1. 光子の分布情報をPMTの平面で各成分 (*x,y*) (円柱座標が 適切?) に分けてそれぞれ最大値を示したPMTを判定

2. そのPMTまわり(数台?)のみからのデータを最小二乗法 を用いてガウスフィッティング

3. 更に中心に近い領域のみのPMTからのデータのみをガウ スフィッティング

4. 分散から深さ方向の成分の決定 (σとzの関係をシミュレート?)

To do



• 検出光子の総数からエネルギーの推定

・クラスタリングについて